

スポット展示  
収蔵コレクション展 19

生誕 100 年

# 金達寿展



「対馬から朝鮮半島を望む」 撮影・李進熙

<sup>キムダルス</sup>金達寿(1920～1997)は在日朝鮮人としての経験を核に、作品を通して人間とはなにか、どうあるべきかを問い続けた作家でした。

日韓併合下の朝鮮・慶尚南道<sup>キョンサンナムド</sup>に生まれ、10歳で日本へと渡った金達寿は貧しい家計を助けながら文学を志し、戦後「玄海灘」「太白山脈」などを発表、在日朝鮮人作家の先駆けとして活躍します。また、戦中戦後の約10年間を横須賀に暮らした、神奈川に縁の深い作家でもあります。後半生では朝鮮と日本の関わりについて古代にさかのぼって追究、ライフワーク「日本の中の朝鮮文化」に結実させて行きました。

当館では、金達寿資料を2003年(平成15)に受贈し、「金達寿文庫」として保存してきました。2020年(令和2)が金達寿生誕100年にあたるのを機に、日本人と朝鮮人の相互理解を希求したその生涯と作品を「金達寿文庫」資料を中心に紹介します。

## 1 朝鮮から日本へ i

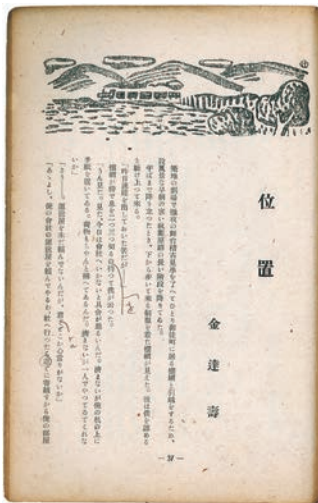
金達寿が父・<sup>キムピョンギョ</sup>金柄奎と母・<sup>ソンボクナム</sup>孫福南の三男として1920年1月17日(旧暦1919年11月27日)に生まれたころ、地主だった金家は没落の一途をたどっていた。一家離散ののち、父と次兄が次々と亡くなり、1930年、10歳のとき、先に東京で暮らしていた長兄に連れられ、祖母を郷里に残して〈内地〉に渡る。東京で下宿を営んでいた母、妹とも再会し、すぐに家計を助けて働きはじめた。

11歳のとき、夜学で初めて教育を受けるようになると向学心が芽生え、翌年、尋常小学校に編入し日本語で自由に読み書きができるまでになる。「朝鮮人」とはやしたてられては喧嘩をする一方で、少年雑誌を貸してくれたたり、遠足代のカンパを呼び掛けてくれたりする友人や、分け隔てしない教師らにかこまれて少年時代の一時期を過ごした。小説家を志すようになるのもこのころだった。

十二支像(卯) 拓本 慶州・<sup>キムユジン</sup>金庚信將軍墓の護石の一つ。金庚信は新羅の英雄で、金達寿と同じ本貫(氏族発祥地+姓)・<sup>キム</sup>金海金氏の祖先にあたる。



源氏前尋常小学校のころ 後列学生帽をかぶっているのが金達寿、前列左が母・孫福南。夜学に約1年通った後、12歳で3年次の最終学期に編入した。



「位置」 「芸術科」1940年8月号 初めて活字になった短編小説。書き込みは誤字脱字の訂正。朝鮮人の「僕」と日本人の「棚網」の同居生活の始まりから破綻までを描く。



神奈川新聞社横須賀支社で 1944～1945年ころ1942年1月、社長・樋口宅三郎に手紙を出し、採用される。1943年、京城に渡り京城日報社員となるが、1944年には神奈川新聞社に復社、1945年5月まで横須賀支社に記者として勤めた。

## 1 朝鮮から日本へ ii

生活が苦しく小学6年生のとき退学を余儀なくされるが、学びへの渴望はやまず、仕事との両立に苦しんでいた。このころ、『志賀直哉集』(改造社)を読んで強い影響を受けたことが、〈朝鮮人としての人間的眞実を書く〉〈日本人の人間的眞実に向かつて訴える〉という、金達寿が小説家として書くべき「基本的な総主題」を決定付ける機縁となる。

再婚して横須賀に住んでいた母のもとで始めた屑屋の仕切り業が軌道にのり、19歳で日本大学専門部に学ぶことになった。資格を満たしていなかったため、妹の夫の名義で入学するが、本名で専門部芸術科創作科へ編入。小説「位置」を日大芸術科の雑誌「芸術科」に発表し、作家としてのスタート地点に立つ。

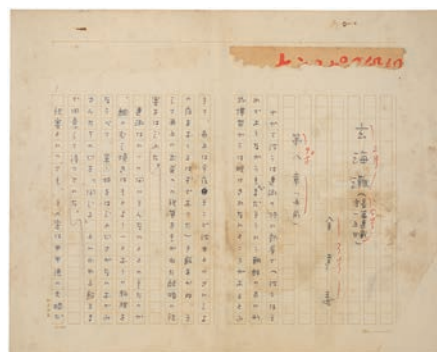
1941年(昭和16)12月、日米開戦のため繰り上げ卒業となり、翌年から横須賀の神奈川日日新聞社(入社後間もなく神奈川新聞社に統合)や京城日報社の記者として働く。このとき、出陣を志願した朝鮮人学徒を取材したり、戦意を昂揚する記事を書いたりした経験は、強い自己批判となって残った。日本帝国主義支配に荷担したという悔恨の意識は「玄海灘」などの作品に投影されている。

## 2 在日朝鮮人作家として

横須賀の青年たちと終戦＝解放を迎えた金達寿は、ただちに朝鮮人自治組織・横須賀在日朝鮮人同志会の立ち上げや、全国的組織・在日朝鮮人連盟(朝連)の結成に参加し、総合雑誌「民主朝鮮」を創刊する。すべての在日朝鮮人の帰国、南北の統一と完全独立を願い、何を顧みず働いたこのころを自ら「活気横溢」と表現している。

1946年には、中野重治、小田切秀雄の推薦で新日本文学会に入会する。戦前から戦後にかけての朝鮮を舞台にした「後裔の街」「玄海灘」「太白山脈」などの長編をはじめ数々の小説を発表、また文学運動も精力的に推進し、在日朝鮮人作家として日本の文学界に確固たる存在感を示すようになる。

1949年、日本共産党に入党するが、党の分裂に遭遇、1年をまたずに除名される。また、1955年には朝連の後継団体・在日朝鮮人総連合会(総連)結成に参加し、朝鮮民主主義人民共和国への帰国事業の推進や、金嬌老事件裁判の特別弁護人を務めるなど、在日朝鮮人のために力を尽くした。しかしながら、執筆や行動に制約や妨害を受けるなど、組織と個人の関係で苦しむことも多かった。



「玄海灘」原稿 「新日本文学」 1952年1月～1953年11月に連載 京城日報社時代の金達寿を投影した西敬泰と、大地主の息子・白省吾の視点から日本支配下の朝鮮を描いた長編小説。芥川賞、新潮社文学賞候補作。

「朴達の裁判」原稿 「新日本文学」 1958年11月号に掲載 「南部朝鮮K」を舞台に「朴達」と呼ばれる青年が、権力に対して次々にしかけるユニークな抵抗闘争を軽快な筆致で描く。再び芥川賞候補となるが、受賞には至らなかった。





### 3 「日本の中の朝鮮文化」への旅

1969年に、鄭貴文、<sup>チョンキムン</sup> 詔文兄弟が「日本の中の朝鮮文化」を創刊。彼らは金達寿とともに朝鮮からの渡来人ゆかりの遺跡を踏査していた。雑誌には自分の民族の文化を知らな過ぎた反省と、日本の朝鮮文化遺跡を明らかにすることで両国の連帯に寄与しようとする願いがこめられていた。金達寿はじめ作家の司馬遼太郎、松本清張、歴史学者・上田正昭、物理学者・湯川秀樹など各界から執筆者、座談会参加者を招き、折しも1972年に発見された高松塚古墳による古代史ブームの到来とも相まって読者を増やし、1981年6月、50号まで刊行。

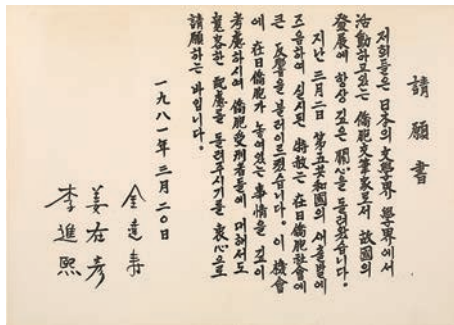
1970年1月からは、金達寿にとって後半生のライフワークとなった「日本の中の朝鮮文化」シリーズの連載が始まる。古代、朝鮮とは日本にとって何であったか、日本とは朝鮮にとって何であったかを追究することを目的としていた。蔑視感を伴う「帰化人」という言葉についての問題提起のもと、自身の紹介する古代遺跡が、日本の朝鮮征服によって連れてこられた「帰化人」ではなく、まだ国の概念もない時代に朝鮮半島から渡ってきた「渡来人」の遺したものであることを世に示し、歴史学の世界にも波紋を投げかけた。シリーズは1991年(平成3)11月まで21年の歳月をかけて全12巻にまとめられた。

「日本の中の朝鮮文化」を励ます会で1973年2月 左から司馬遼太郎、岡本太郎、金達寿、竹内好。



「山陰路から山陽路へ」旅行記録 1969年10月3～10日 「日本の中の朝鮮文化」連載前から各地の遺跡を旅し、多数の資料を集め、詳細なメモを残していた。山陰では移動の車中、朝鮮半島からのラジオ放送が入り、故国の歌が聞こえ、思わず涙ぐんだことなども記している。

金達寿、姜在彦、李進熙「請願書」写し 1981年3月20日 ともに「季刊三千里」の編集委員を務める朝鮮史研究の姜在彦、考古学研究的李進熙と訪韓し、連名で提出した請願書。検察局長ら立ち会いのもと法務部長官に提出した。全文の日本語訳を『故国まで』に収録。



### 4 日本から朝鮮へ

終戦後、在日朝鮮人は出身地を問わず一律「朝鮮籍」となった。大韓民国樹立後、「韓国籍」への切り替えは可能となったが、金達寿は「朝鮮籍」を保持していたことから、郷里のある大韓民国を容易に訪れることができないでいた。

1981年3月20日から27日まで、在日朝鮮人政治思想犯の助命減刑請願のため、旅行証明書の発給を受け大韓民国を訪問する。「太白山脈」続編執筆のためにもその舞台となる地を見たい、という強い思いもあった。37年ぶりに朝鮮半島の地を踏み、40年ぶりに生まれ故郷にも立ち寄ることができたが、日本に戻ると様々な非難を浴び、統一朝鮮への帰国を願う友人たちの中には金達寿から離れてゆく者も少なくなかった。

1982年、金達寿が呼びかけた日韓相互理解のための座談会が実現。その後、韓国内で小説や日本の朝鮮遺跡を紹介する著作が翻訳刊行された。完結後の「日本の中の朝鮮文化」シリーズについても、各地を旅しながらその後の発見、調査を文庫版の巻末に補い、「新考・日本の朝鮮文化遺跡」などを書き継いだ。病に倒れ、1997年に没するまで、朝鮮人と日本人の相互理解のための活動は続けられた。



左・「季刊三千里」 1975年2月から1987年5月まで刊行。右・「季刊靑丘」「季刊三千里」の後継誌として1989年8月から1996年2月まで刊行。いずれも朝鮮半島統一の願いをこめ、日本との相互理解の架け橋となることを目指したもの。両誌を通して金達寿は編集委員を務めた。

#### 主な出品資料

- 【原稿・草稿】
  - 「私の少年時代」、「最後の参奉」、「崔永俊の抗議」、「朴達の裁判」、「随証治之」、「渡来人はどう考えられてきたか」、「対馬まで」、「行基の出家」、「遊行の行基」、「文庫版への補章(『日本の中の朝鮮文化』12)」、「備忘録」、「『五十周年の新宿あつま』あとがき」
  - 「濁酒の乾杯」、「玄海灘」、「密航者」 当館蔵
- 【創作ノート、メモ、日記】
  - 「太白山脈」創作ノート、「太白山脈」創作メモ、「朝鮮の俚諺」メモ、「山陰路から山陽路へ」旅行記録、「九州路を行く(第一回)日誌」、「九州路を行く(第二回)」、「上野に残された痕跡」メモ、「阿波・土佐 讃岐」旅行記録、「九州(北部(1))」旅行記録
  - 栗林一石路 日記 当館蔵・栗林一路氏寄贈
- 【金達寿書簡】
  - 野間宏 あて 1983年10月10日 当館蔵・野間宏文庫
  - 原泉 あて 1980年6月16日消印 当館蔵・緩目卯女氏寄贈
  - 中野重治 あて 1964年11月4日消印、1971年5月17日 当館蔵・緩目卯女氏寄贈

#### 【金達寿あて書簡】

- 金史良 1941年11月15日消印、同19日消印、同28日消印、1942年1月30日
- 秋田雨雀 1954年3月1日(新日本文学小説委員会あて)
- 荒正人 1973年2月[2日]、同24日、[1973年]
- 司馬遼太郎 1981年5月30日、1995年1月17日
- 須田勉太 [1979年12月]、1980年9月15日、1981年10月2日
- 中野重治 1959年3月11日消印、1971年4月4日消印
- 野間宏 1983年7月27日、1988年1月25日消印

#### 【書画】

- 十二支像(卯) 拓本
- 加藤松林人 [韓国風景]
- 須田勉太 「金達寿像」、「行基の時代」装幀案、干支の画「未」「申」「酉」「亥」

#### 【文書】

- 金達寿、姜在彦、李進熙「請願書」写し、訪韓日程表、旅行証明書写し

#### 【受賞関係 旧蔵品】

- 「平和文化賞」賞状・楯、木膳、筆筒、陶磁器など

※出品資料は変更になることがあります。所蔵注記空欄は当館蔵・金達寿文庫。

金達寿文庫(寄贈者・全玉寿 図書 5,950冊 雑誌 3,470冊 特別資料 1,230点)

金達寿の没後、「金達寿記念室設立準備委員会」が管理していた金達寿資料を2003年11月から受贈。2004年、文庫として保存していくことを決定、著作権も譲り受ける。

会場 県立神奈川近代文学館 第3展示室  
〒231-0862 神奈川県横浜市中区山手町110  
主催 県立神奈川近代文学館、公益財団法人神奈川文学振興会  
会期 2020年12月12日～2021年3月14日

後援 NHK横浜放送局、FMヨコハマ、  
神奈川新聞社、tvk(テレビ神奈川)  
協賛 横浜高速鉄道、神奈川近代文学館を支援する会  
広報協力 K A A T 神奈川芸術劇場

## ●金達寿略年譜●

金達寿『わがアリランの歌』『わが文学と生活』、廣瀬陽一『日本のなかの朝鮮 金達寿伝』(2019年11月 クレイン)を参照して作成しました。

- 1920年 0歳 1月17日、日本の統治下の慶尚南道昌原郡(現・大韓民国昌原市)に誕生。父・金柄奎、母・孫福南の三男。
- 1925年 5歳 冬、父母は、長兄・声寿、妹・ミヨンスを連れ長野県諏訪郡平野村(現・岡谷市)に渡る。仕事が無く東京に出る。達寿は祖母、次兄・良寿と暮らす。
- 1928年 8歳 この年、次兄が昌原で、父が東京で病死。達寿と祖母は極貧の生活を送る。
- 1930年 10歳 秋、長兄と(内地)に渡り、母と東京府荏原郡荏原町(現・品川区)で暮らす。達寿は納豆売り、肩抬いをして家計を助ける。
- 1931年 11歳 4月、大井尋常夜学校に入学、初めて教育を受ける。◆9月、満州事変。
- 1932年 12歳 年初に東京府荏原郡源氏前尋常小学校3年に編入。母が再婚、横須賀に移り、達寿は長兄夫婦が働く大森区馬込町(現・大田区)の工事現場の飯場から通学。作家になることを考え始めノートに小説を書く。
- 1934年 14歳 6年に進級後、貧困のため退学。仕事、居所を転々としたのち横須賀市春日町の母宅に移り、映写技師の見習いとして働く。
- 1936年 16歳 4月、夜間制の私立横須賀中等学校に入学するも屑屋の仕事と両立せず退学。
- 1937年 17歳 張斗植と出会い、朝鮮人の学習会をつくるが、特高等などによって活動を止められる。同人誌「雄叫び」を創刊。
- 1938年 18歳 秋ころ、大学の入学資格を得るために上京し、屑屋をしながら正則商業学校に通うが挫折、横須賀に戻る。
- 1939年 19歳 4月、日本大学専門部[文科]に入学。9月、専門部芸術科創作科へ編入、池袋に転居。
- 1940年 20歳 8月、「位置」を「芸術科」に発表。母、長兄と昌原に帰省、京城を見物。
- 1941年 21歳 11月、金史良を知る。「族譜」を「新芸術」に発表。12月、日米開戦により繰り上げ卒業。
- 1942年 22歳 1月、神奈川日日新聞社(同年、神奈川新聞社に統合)に入社、横須賀支局で勤務。
- 1943年 23歳 春ころ、京城に旅行。5月、京城日報社に入社。◆10月、京城で朝鮮人学生の学徒出陣の壮行会。
- 1944年 24歳 3月、神奈川新聞社に復職。このころ、回覧雑誌「鶏林」創刊。12月、金福順と結婚、横須賀市大津に住む。
- 1945年 25歳 5月、横浜大空襲で神奈川新聞社全壊となり失職。8月、日本の敗戦＝朝鮮の解放後「横須賀在住朝鮮人同志会」を結成。10月、在日本朝鮮人連盟(朝連)結成大会に参加。12月5日、長男・章明誕生。その後、妻が結核を再発。
- 1946年 26歳 4月、「民主朝鮮」創刊。9月30日、妻死去。10月、新日本文学会に入会。
- 1947年 27歳 2月、在日本朝鮮文学者を結成し、10月に「朝鮮文芸」日本語版を創刊。
- 1948年 28歳 3月、『後裔の街』(朝鮮文芸社)。◆4月、済州島4.3事件。8月、大韓民国樹立。9月、朝鮮民主主義人民共和国樹立。
- 1949年 29歳 3月、奈良、京都に旅行。5、6月ころ、日本共産党に入党。この年、東京朝鮮中高等学校高等部の教師を務める。
- 1950年 30歳 1月、日本共産党から除名。5月、『叛乱軍』(冬芽書房)。年末、崔春慈と再婚(67年離婚)、中野区に住む。◆6月、朝鮮戦争。
- 1952年 32歳 9月、『富士のみえる村で』(東方社)。
- 1954年 34歳 1月、『玄海灘』(筑摩書房)。
- 1955年 35歳 5月、在日本朝鮮人総連合会(総連)結成大会に参加。9月、『前夜の章』(東京書林)。
- 1956年 36歳 9月、『故国の人』(筑摩書房)。12月、練馬区に転居。
- 1957年 37歳 4月、『日本の冬』(筑摩書房)。6月、第4回平和文化賞受賞。11月、リアリズム研究会結成。
- 1958年 38歳 9月、『朝鮮』(岩波書店)。10月、「リアリズム」創刊。11月、「鶏林」創刊。
- 1959年 39歳 5月、『朴達の裁判』(筑摩書房)。『番地のない部落』(光書房)。12月、北朝鮮への第1次帰国船を新潟港で見送る。
- 1963年 43歳 1月、『夜きた男』(東方社)。6月、『密航者』(筑摩書房)。10月、『中山道』(東方社)。◆12月、朴正熙、韓国大統領に就任。
- 1965年 45歳 6月、母死去。8月、新日本文学会退会。12月、「民主文学」創刊。◆12月、日韓基本条約発効。
- 1966年 46歳 8月、『公僕異聞』(東方社)。
- 1968年 48歳 2月、金嬉老事件起こり、その後の裁判で特別弁護人を務める。
- 1969年 49歳 3月、「日本のなかの朝鮮文化」創刊。5月、『太白山脈』(筑摩書房)。
- 1970年 50歳 12月、調布市に転居。『日本の中の朝鮮文化』全12巻(～91年11月 講談社)。◆6月、金芝河、反共法違反容疑で逮捕。
- 1972年 52歳 10月、『古代文化と「帰化人」』(新人物往来社)。11月、『日本の朝鮮文化』(司馬遼太郎、上田正昭と共編 中央公論社)。12月、『古代遺跡の旅』(サンケイ新聞出版局)。
- 1973年 53歳 ◆8月、金大中拉致事件。
- 1974年 54歳 7月、鶴見俊輔、針生一郎、李進熙と金芝河の釈放を求めハンスト。10月、鄭詔文、李進熙と対馬に行き、朝鮮半島を望む。
- 1975年 55歳 2月、『季刊三千里』創刊。5月、『小説在日朝鮮人史』上下(～7月 創樹社)。調布市に家を購入。
- 1976年 56歳 1月、『日本古代史と朝鮮文化』(筑摩書房)。2月、『金達寿評論集』上下(～3月 筑摩書房)。3月、「NHKに朝鮮語講座の開設を要望する会」結成。
- 1977年 57歳 6月、『日本と朝鮮—民族・歴史・文学—金達寿対談集』(講談社)。『わがアリランの歌』(中央公論社)。
- 1979年 59歳 1月、『日本の中の古代朝鮮』(学生社)。4月、『落照』(筑摩書房)。10月、『対馬まで』(河出書房新社)。◆10月、朴大統領暗殺事件。
- 1980年 60歳 2月、『古代日朝関係入門』(筑摩書房)。4月、『金達寿小説全集』全7巻(～10月 筑摩書房)。◆5月、光州事件。9月、全斗煥が韓国大統領に就任。
- 1981年 61歳 3月、姜在彦、李進熙、徐彩源と訪韓。6月、『手記—in日朝鮮人』(姜在彦と共編著 龍溪書舎)。
- 1982年 62歳 3月、『行基の時代』(朝日新聞社)。4月、『故国まで』(河出書房新社)。
- 1983年 63歳 中野区に転居、亡くなるまでここで暮らす。7月、『日韓理解への道』(司馬遼太郎らと共著 読売新聞社)。
- 1984年 64歳 9月、『古代日本と朝鮮文化』(筑摩書房)。
- 1985年 65歳 9月、中野区役所での外国人登録切り替え時に指紋押捺を拒否。
- 1988年 68歳 この年、国籍を「韓国」に切り替える。12月、胆石、胃潰瘍のため半年間入院、生死の境をさまよう。
- 1989年 69歳 8月、『季刊青丘』創刊。
- 1990年 70歳 4月、在日韓国・朝鮮人の処遇改善に関する提言の呼びかけ人に連なる。12月、『渡来人と渡来文化』(河出書房新社)。
- 1993年 73歳 ◆1月、改正外国人登録法施行、特別永住者の指紋押捺制度廃止。
- 1994年 74歳 6月、『見直される古代の日本と朝鮮』(大和書房)。
- 1996年 76歳 2月、金達寿に取材したNHK衛星第2テレビ「世界・わが心の旅—韓国・はるかなる故国」放映。
- 1997年 77歳 1月、長兄死去。5月24日、肝不全のため死去。◆10月、金正日、朝鮮労働党中央委員会総書記に就任。
- 1998年 5月、『わが文学と生活』(青丘文化社)。◆2月、金大中、韓国大統領に就任。